

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第18回/彫刻家ブランショと朝香宮—パリの思い出を胸に(その3)

Residence of Prince Asaka 1933—

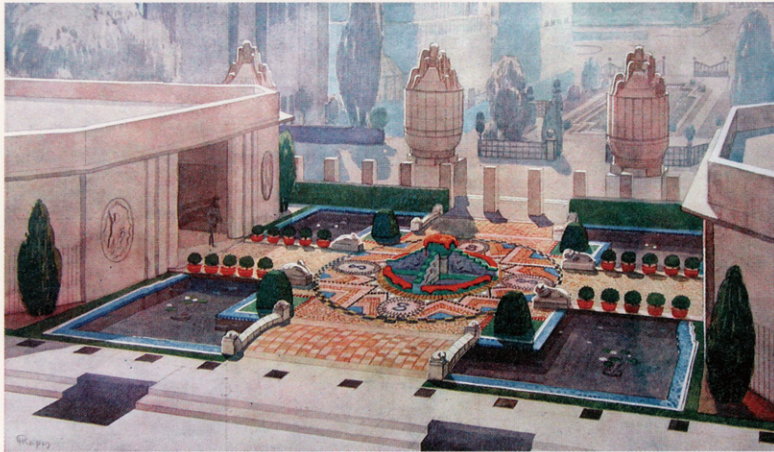


図1

朝香宮両殿下が感銘を受けたアール・デコ博覧会には、アンリ・ラバンやリュールマン、シュール・エ・マールら、多くの芸術家たちが参加していました。宮夫妻と親交のあった彫刻家イヴァン・レオン・ブランショもその一人でした。

国立セーヴル製陶所のアーカイブには、同所が博覧会に出展したパヴィリオンの外壁を飾る計8枚のテラコッタ製楕円形レリーフのうち、外側の2枚をブランショが担当したと記されています*1。このパヴィリオンの中庭はラバンが中心となってデザインしたものでした(図1)。ラバンとブランショは博覧会の仕事を通じて接点があり、ブランショの足跡はこの後、常にラバンとリンクしたものとなっていきます。

紳士録などの資料によれば、ブランショは1920年代から30年代にかけて、パリ市内を頻繁に転居していました。朝香宮邸の装飾(図2)を手掛けていた1932年当時は、14区トンプ・イソワール通り37番地に暮らしていましたが、この頃のラバンのアトリエ*2もまた、同じ通りの35番地に位置していたのです(図3)。朝香宮邸の内装を担当する二人の芸術家が、同じ時期に隣り合うアパートマンを拠点にしていたという事実は、単なる偶然なのでしょうか。

両者の接点はこればかりではありません。1930年、ブランショはセーヴル製陶所における彫刻作

品検査官*3に就任し、33年から附属の学校で美術解剖学の講師を務めています。同じ頃にラバンはやはりセーヴルで美術・技術委員会の委員として装飾作品の管理指導にあたっていましたが*4、ブ

ランショも35年に

ラバンと同じ委員に就任、その後は製陶所を訪れる人々のために、セーヴルの歴史や技法についての解説も行っていました。

朝香宮邸の装飾がラバンに委嘱された経緯は今なお謎に包まれたままですが、宮家と親交があり、ラバンとも接点のあったブランショが介在していた可能性を指摘することはできるでしょう。



図2

1946年、ブランショは病気のためにセーヴルを退職し、翌年ひっそりと息を引き取りました。晩年のブランショは、芸術家として必ずしも恵まれていたとはいえませんでした。彼の残した仕事は、東京の地で今も当時の輝きを保ち続けています。(牟田)



図3

図1. ラバンによるセーヴル館中庭デザイン案水彩画。ブランショが制作を担当したレリーフ2枚のうち、1枚の納品を督促する文書(控え)が現存しています。

図2. ブランショ制作の大理石製レリーフ「戯れる子供たち」。このレリーフは現在でも庭園美術館(旧大広間)に飾られています。写真はパリ国立公文書館に保管されているブランショ関係の文書に含まれているもので、彼自身により「Jeux d'Enfants - Palais du Prince Asaka Tokyo 1930-31」という書き込みがなされています。

図3. 現在のトンプ・イソワール通りのアパートマン。右側がブランショの住んでいた37番地。左側はラバンのアトリエがあった35番地。

*1. ラバンがデザインした中庭に面した4枚は、彫刻家のマックス・ブロンダ(Max Blondat)が担当、外側の2枚はゴモン(彫刻家のMarcel-Armand Gaumont)が手掛けていました。

*2. 当時のラバンの住まいは、アトリエからはダンフェール・ロシュロー広場を挟んで北側の、ラスバユ大通り274番地のアパートマンにありました。

*3. Inspecteur des travaux de sculpture

*4. Comité artistique de la Manufacture ラバンが装飾作品の管理指導にあっていたのは1934年まで、以後39年に没するまでは、美術・技術委員会の委員としてのみ在職していました。